

半島一奇抄

泉鏡花

青空文庫

「やあ、しばらく。」

記者が掛けた声に、思わず力が入って、運転手がはたと自動車を留めた。……実は相^{あいのり}乗して席を並べた、修善寺の旅館の主人の談話を、ふと遮った調子はずんで高かったためである。

「いや、構わず……どうぞ。」

振向いた運転手に、記者がちよつとてれながら云ったので、自動車はそのまま一^{ひときし}軋りして進んだ。

沼津に向つて、浦々の春遅き景色を馳^{はし}らせる、……土地の人は（みつと）と云う三津^{みつ}の浦を、いま浪打際とほとんどすれすれに通^{ところ}る処であつた。しかし、これは廻^{みち}り路である。

小暇を得て、修善寺に遊んだ、一——新聞記者は、暮春の雨に、三日ばかり降込められた、宿の出入りも番傘で、ただ垂籠たれこめがちだった本意ほんいなさに、日限ひぎりの帰路を、折から快晴した浦づたい。——「当修善寺から、口野浜くちのはま、多比たひの浦、江の浦、獅子浜ししはま、馬込崎と、駿河湾するがわんを千本の松原へ向つて、富士御遊覧で、それが自動車と来た日には、どんな、大金持ちだつて、……何、あなた、それまでの贅沢ぜいたくでございますよ。」と番頭の膝ひざを敲たたいたのには、少分の茶代を出したばかりの記者は、少からず怯おびかされた。が、乗里おおいかかった船で、一台大に驕おごった。——主人が沼津の町へ私用がある。——そこで同車で乗出した。

おおひと
大仁の町を過ぎて、三福さんぷく、田京たきよう、守木、宗光寺そうこうじ、
おひなわて
小田原の町を過ぎて、三福、田京、守木、宗光寺、

南条——といえは北条の話が出た。……四日町を抜けて、それから小四郎の江間、長塚を横ぎつて、口野、すなわち海岸へ出るのが順路であつた。……

うの花にはまだ早い、山田小田の紫雲英、残の菜の花、並木の随処に相触れては、狩野川が縋子を張つて青く流れた。雲雀は石山に高く囀つて、鼓草の綿がタイヤの煽に散つた。四日町は、新しい感じがする。両側をきれいな細流が走つて、背戸、籬の日向に、若木の藤が、結綿の切をうつむけたように優しく咲き、屋根に蔭つくる樹の下に、山吹が浅く水に笑う……家ごとに申合せたようである。

記者がうっかり見惚れた時、主人が片膝を引いて、前へ屈んで、

「辰さん——道普請がある筈だが前途は大丈夫だろうかね。」

「さあ。」「さあじゃないよ、それだと自動車は通らないぜ。」

「もつとも半月の上になりますから。」と運転手は一筋路を山の根へ見越して、やや反そった。「半月の上だつて落着いてゐる処じゃないぜ。……いや、もうちと後路あとで気をつけようと、修善寺を出る時から思つていながら、お客様と話で夢中だつた。——」

「何、海岸まわりは出来ないのですかね。」「いいえ、南条まで戻つて、三津へ出れば仔細しさいありませんがな、気の着かないことをした。……辰さん、一度聞いた方がいいぜ。」「は、そういたしましょう。」「恐ろしく丁寧になつたなあ。」と主人は、目鼻をくしやくしやとさせて苦笑して、茶の中折帽なかおれぼうを被かぶり直した。

「はやい方が可い、聞くのに——」けれども山吹と藤のほか、村^む路^らの午^{ひる}静^{ずか}に、渠^{かれ}等を差^さ覗^{しのぞ}く鳥の影もなかった。そのかわり、町の出はずれを国道へついて左へ折曲ろうとする角家の小店^{こみせ}の前に、雑貨らしい箱車を置いて休んでいた、半纏^{はんでんぎ}着の若い男は、軒の藤を潜^{くぐ}りながら、向うから声を掛けた。「どこへ行^ゆくだ、辰さん。……長塚の工事は城を築くような騒ぎだぞ。」「まだ通れないのか、そうかなあ。」店の女房も立って出た。「来月半ばまで掛^かるんだとよう。」「いや、難^{ありがと}有^う。さあ引返した。……いやくも温泉場において、お客を預る自動車屋ともあるものが、道路の交通、是非善悪を知らんというのは、まことにもって不心得。」……と、少々芝居がかりになる時、記者は、その店で煙草^{たばこ}

を買った。

砂を拵げて南条に引返し、狩野川を横切った。古奈、長岡——
長岡を出た山路には、遅桜おそざくらの牡丹咲ぼたんざきが薄紫に咲いていた。
長瀬を通つて、三津の浜へ出たのである。

富士が浮いた。……よく、言う事で——佐渡ヶ島には、ぐるりと周囲に欄干まわりがあるか、と聞いて、……その島人に叱られた話がある。が、巖山いわやまの巉崖ざんがいを切つて通した、榮螺さざえの角つのに似たぎざぎざの麓ふもとの径こみちと、浪打際との間に、築つきめく繞らした石の柵しがらみは、土手というよりもただ低い欄干に過ぎない。

「お宅の庭の流ながれにかかった、橋廊下の欄干より低いくらいで、……すぐ、富士山の裾すそを引いた波なんですな。よく風で打ぶつけませ

んね。」

「大丈夫でございますよ。後方^{あと}が長浜、あれが弁天島。——自動

車は後眺望^{あとながめ}がよく利きませんな、むこうに山が一つ浮いていま

しよう。淡島です。あの島々と、上の鷺頭^{わしずやま}山に包まれて、この

海岸は、これから先、小海^{こうみ}、重寺^{しげでら}、口野などとなりますと、御

覧の通り不穏な駿河湾が、山の根を奥へ奥へと深く入込^{いりこ}んでおり

ますから、風波の恐怖^{おそれ}といつてはほとんどありません——そのか

わり、山の麓の隅の隅が、山扁^{へん}の岬^{さき}といった僻地^{へきち}で……以前は、

里からではようやく木樵^{きせり}が通いますくらい、まるで人跡絶えたと

いった交通の不便な処でございましてな、地図をちよつと御覧な

すつても分りますが、絶所、悪路の記号という、あのパチパチッ

とした線香花火が、つい頭の上の山々を飛び廻っているのですから。……手前、幼少の頃など、学校を怠^{ずる}けて、船で淡島へ渡つて、鳥居前、あの頂^{てっぺん}辺で弁当を食べるなどはお茶の子だったものですが、さて、この三津、重寺、口野一帯と来ますと、行軍の扮^{いでた}装^ちでもむずかしい冒険だとしたものでしてな。——沖からこの辺の浦を一目に眺めますと、弁天島に尾を曳^ひいて、二里三里に余る大竜が一条^{ひとすじ}、白浪の鱗^{うろこ}、青い巖^{いわ}の膚^{はだ}を横^{よこ}えたように見える、鷲頭山を冠^{かむり}にして、多比の、就^{なかんずく}中入窪^{いりくぼ}んだあたりは、腕を張つて竜が、爪に珠を掴^{つか}んだ形だと言います。まったく見えますのでな。」

「乗つてゐるんですね！ その上にいま……何だか足が擦^{くすく}つたいよ

うですね。」

記者はシイツに座をずらした。

「いえ、決して、その驚かし申すものではありません。それですから、弁天島の端なり、その……淡島の峯から、こうこの巖山を視^{なが}めますと、本で見ました、仙境、魔界といった工合で……どんなか、拍子で、この崖^{がけ}に袖^{そで}の長い女でも居ようものなら、竜宮から買^あいものに躰^{あら}われたかと思つたもので。——前途^{さき}の獅子浜、江の浦までは、大分前に通じましたが、口野からこちら……」

自動車は、既に海に張出した石の欄干を、幾^{いくところ}処^{ところ}か、折曲り折曲りして通つていた。

「三津を長岡へ通じましたのは、ほんの近年のことで、それでも

十二三年になりましたようか。——可笑おかしな話がございますよ。」

主人は、パツパツと二つばかり、巻まきた 蓐たばこを深く吸つて、

「……この石の棧道が、はじめて掛かりました。……まず、開通式

といった日に、この村長——唯ただいま今でも存命で居ります——年

を取ったのが、大勢と、村口に客の歡迎に出ておりました。県知

事の一行が、真まっさき先に乗込んで見えた……あなた、その馬車——」

自動車の警笛に、繰返して、

「馬車が、真正面に、この棧道一杯になつて大く目に入つたと思

召せ。村長の爺じいさま様が、突然七なな八やっつ歳の小児こどものような奇声を上げ

て、（やあれ、見やれ、鼠ねずみが車を曳ひいて来た。）——とお話

さ、話のようございましたな。」

「やあ、しばらく！」

記者が、思わず声を掛けたのはこの時であつた――

肩も胸も寄せながら、

「浪打際の山の麓を、ふもと向うから寄る馬車を見て――鼠が車を曳いて来た――成程、しかし、それは事実ですか。」

記者が何ゆえか意気込んだのを、主人は事もなげに軽く受けた。「ははは、一つばなし。……ですが事実にも何にも――手前も隣郡のお附合、……これで徽章きしょうなどを附けて立会いました。爺様の慌てたのを、現にそこに居て、存じております。が、別に不思議

議はありません。申したほどの嶮道けんどうで、駕籠かごは無理にもどうでしようかな——その時七十に近い村長が、生れてから、いまだかつて馬というものの村へ入ったのを見たことがなかったのでございますよ。」

「馬を見て鼠……何だか故事がありそうで変ですが——はあ、そうすると、同時に、鼠が馬に見えないとも限りませんかしら。」

「は？」

「鼠が馬に見えるかも知れませんが、どうでしょう。」

「いや、おっしゃると。」

主人は少し傾いたが、

「ただ、それだけの話で、……深く考えた事ありませんが、成

程、ちよつと似ているかも知れませんが、もつとも黒い奴ですがな。
」

「御主人——差当りだけでも、そう肯定をなさるんなら、私が是非話したい事があるのです。現在、しかもこの土地で、私が実見した事実ですがね。余り突拍子がないようですから——実はまだ、誰にも饒舌しゃべりません。——近い処が以前からお宅をひいきの里見、中戸川さん、近頃では芥川さん。絵の方だと横山、安田氏などですか。私も知合ではありますが、たとえば、その人たちにも話をしませぬ。芥川さんなどは、話上手で、聞上手で、瘦やせていても懐中ふところが広いから、嬉しそうに聞いてはくれるでしょうが、苦にがわ笑らいものだろうと思うから、それにさえ遠慮をしているんですが

ね。——御主人。」

「ははあ、はあ……で、それは。」

「いや、そんなに大した事ではありません。実は昨年、ちようど今頃……もう七八日^{ななようか}あとでした。……やっぱりお宅でお世話に

なつて、その帰途^{かえり}がけ、大仁からの電車でしたよ。この月二十日

の修善寺の、あの大師講の時ですがね、——お宅の傍^{そば}の虎溪橋^{こけいばし}

正面の寺の石段の真中^{まんなか}へ——^{おびただし}夥多^{さんけい}い参詣だから、上下^{うえした}

の仕切^{しきり}がつきましよう。」

「いかにも。」

「あれを青竹一本で渡したんですが、丈といい、その見事さ、かこみの太さといつちやあない。——俗に、^{まめだぬき}豆狸は竹の子の根

に籠こもるの、くだ狐ぎつねは竹筒の中で持運ぶのと言うんですが、燈心で釣つりをするような、嘘うそばかり。出でも、入はいりも出来るものか、と思つていましたけれども、あの太さなら、犬の子はすぽんと納まる。……修善寺は竹が名物だろうか、そういえば、随分立派なのがすくすくある。路ばたでも竹の子のずらりと明るく行列をした処を見掛けるが、ふんだんらしい、誰も折りそうな様子も見えない。若竹や——何とか云う句で宗匠を驚あしたと按摩あんまにまで聞かされた——確たしかに竹の楽土だと思いました。ですがね、これはお宅の風呂番が説破しました。何、竹にして売うる方がお錢あしになるから、竹の子は掘ほらないのだと……少すこく幻滅を感じましたが。」

主人は苦笑した。

「しかし——修善寺で使った、あのくらいなのは、まったく見た事はない、と田京あたりだったでしょう。温泉で、見知越で、

乗合わせた男と——いや、その男も実は、はじめて見たなどと話

していると、向う側に、革の手鞆てかばんと、書もつらしい、袱紗包ふくさづつみ

を上置いて、腰を掛けていた、土耳其形の毛帽子を被った、棗な

色つめいろの面長おもながで、髯ひげの白い、黒の紋織もんおりの被布ひふで、人がらのい

い、茶か花の宗匠といった風の……」

半ば聞いて頷うなずいた。ここで主人の云ったのは、それは浮島禪師うとうぜんじ、

また桃園居士とうえんこじなどと呼ばれる、三島沼津を掛けた高持たかもちの隠居で。

……何不足のない身の上とて、諸芸に携わり、風雅たのしを楽しむ、就なかん

中ずく、好んで心学一派のごとき通俗なる仏教を講じて、遍あまねく近国

を教導する知識だそうである。が、内々で、浮島うとうをかなで読むお爺さん——浮島うきしまじい爺さんという渾名あだなのあることも、また主人が附加えた。

「その居士こじが、いや、もし……と、莞爾にこにこ々々と声を掛けて、……あれは珍らしい、その訳ちじや、茅野と申して、ここから宇佐美の方へ三里も山奥の谷間たにあいの村が竹の名所でありましてな、その講中が大自慢で、毎年々々、南無なむだいしへんじようこんごう大師遍照金剛でかつぎ出して寄進しますのじや……と話してくれました。……それから近づきになって、やがて、富士の白雪あさ日でとけて、とけて流れて三島へ落ちて、……ということに、なったので。」

自動車が警笛を。

主人は眉の根に、わぎと深く皺しわを寄せて、鼻で撓ためるように顔を向けた。

「はてね。」

「いや、とけておちたには違いはありませんがね——三島女郎じよろし衆ゆの化粧の水などという、はじめから、そんな腥なまぐさい話の出よう

筈はありません。さきの御仁体でも知れます。もうずつと精進で。

……さて、あれほどの竹の、竹の子はどんなだろう。食べたら古

今の珍味だろう、というような話から、修善寺の奥の院の山の独う

活ど、これは字も似たり、独鈷とつこうどと称となえて形も似ている、仙家の

美膳びぜん、秋はまた自然薯じねんじよ、いずれも今時の若がえり法などは大俗

で及びも着かぬ。早い話が牡丹ぼたんの花片はなびらのひたしもの、芍薬しやくやく

の酢味噌あえ。——はあはあと、私が感に入つて驚くのを、おかしがつて、何、牡丹のひたしものといった処で、一輪ずつ枝を折る殺風景には及ばない、いけ花の散つたのを集めても結構よろしい。しかし、贅沢といえ、まことに蘭飯らんぼんと称して、蘭の花をたき込んだ飯がある、禅家の鳳髓ほうずい、これは、不老の薬と申しても可い。——御主人——これなら無事でしよう。まずこの辺まで

は芥川さんに話しても、白い頬を窪まし、口許くちもとに手を当てて頷うなずいていましょうがね、……あとが少しむずかしい。——

私はその時は、はじめから、もと三島へ下りて、一汽車だけ、いつも電車ばかり見て通る、あの、何とも言えない路傍みちばたの綺麗な流ながれを、もつとずツと奥まで見たいと思つていましたから。」

「すなわち、化粧の水ですな。」

「お待ちなさい。そんな流ながれの末じやあ決してない。朝日でとけた白雪を、そのまま見たかったのに相違ないのです。三島で下りると言う、居士が一所に参つて、三島の水案内をしようと言います。辞退をしましたがいや、是非ひとつ、で、私は恐縮をしたんですがね。実は余り恐縮をしなくても可よさそうでしたよ。御隠居様、御機嫌よう、と乗合わせた近まわりの人らしいのが、お婆さんも、娘も、どこかの商人らしいのも、三人まで、小さな荷ですが一つ一つ手伝いましてね、なかなかどうして礼拝されます。が、この人たちの前、ちと三島で下りるのが櫟くすぐったかつたらしい。いいかこつて、私は風流の道づれにされた次第だ。停車場ステーション前

の茶店も馴染なじみと見えて、そこで、私のも一所に荷を預けて、それから出掛けたんですが——これがずツとそれ、昔の東海道、箱根のお関所を成りたけ早めに越して、臼うすころばしから向う阪をさがりに、見ると、河原前の橋を掛けてこの三島の両側に、ちらちら灯が見えようというのでと——どこか、壁張りの古い絵ほどにおもかげの見える、真昼で、ひっそりした町を指さされたあたりから、両側の家の、こう冷い湿しめつぽい裡なかから、暗い白粉おしろいだの、赤い油だのが、何となく匂におつて来ると——昔をしの偲おもぶ、——いや、宿しゆくのなごりとは申す条、通り筋に、あらわな売色のかかる体裁はおおに風俗を害しますわい、と言う。その右みぎ斜ななめな二階の廊下に、欄干に白い手を掛けて立っていた、媚なまめかしい女があります。切組の板で半

身です、が、少し伸上るようにしたから、帯腰がすらりと見える。
 ……水^{みずあさぎ}浅葱の手絡^{てがら}で円^{まるまげ}髻に艶^{つやつや}々と結ったのが、こう、三島の宿を通りかかる私たちの上から覗^{のぞ}くように少し乗出したと思うと、——えへん！……居士が^{おおき}大な咳^{せき}をしました。女がひよいと顔をそらして^{ひさし}廂へうつむくと、猫が隣りから屋根づたいに、伝うのです。どうも割合に暑うごすと、居士は^{トルコ}土耳其帽^{ぼう}を取って、きちんと畳^{てぬぐい}んだ手拭^ふで、汗を拭^ふきましたつけ。……」

主人も何となく中折帽^{なかおれぼう}の工合^{ぐあい}を直して、そしてクスクスと笑った。

「御主人の前で、何も地理を説く要はない。——御修繕中でありました。神社へ参詣をして、裏門の森を抜けて、一度ちよつと田^た

畝道くぼみちを抜けましたがね、穀蔵こくぐら、もの置蔵などの並んだ処を通
 つて、昔の屋敷町といったのへ入つて、それから榎えのきの宮八幡宮―
 ―この境内が、ほとんど水源と申して宜よろしい、白雪のとけて湧わく
 処、と居士が言います。……榎は榎、大楠おおくす、老櫟ふるかし、森々と
 暗く聳そびえて、瑠璃るり、瑪瑙めのうの盤、また薬研やげんが幾つも並んだように、
 蟠わだかまつた樹の根の脈々、巖いわの底、青い小石一つの、その下からも、
 むくむくとも噴出さず、ちろちろちろちろと銀の鈴の舞うように
 湧ぶしつけいています。不躰みたらしですが、御手洗で清めた指で触つて見まし
 た。冷い事、氷のようです。湧いて響くのが一粒ずつ、掌てのひらに玉を
 拾うそうに思われましたよ。

あとへ引返して、すぐ宮前とおりの通から、小橋を一つ、そこも水が

走っている、門ばかり、家は形もない——くぐりもん潜門を押して入る

と——植木屋らしいのが三四人、土をほって、運んでいました。」

——別荘の売りものを、料理屋が建直すのだったそうである。

「築山のあとでしょう。葉ばかりの菖蒲あやめは、根を崩され、霧島が、

ちらちらとくわ鍬の下に見えます。おお御隠居様、大旦那、と植木屋

は一斉に礼をする。ちよつと邪魔をしますよ。で、折れかかった

板橋を跨またいで、さつと銀をよないだ一いっぶく幅ながれなぎさの流の汀へ出ました。

川というより色紙形の湖です。一等、水の綺麗な場所だな。居士

が言いましたよ。耕地が一面に向うへ展ひらけて、正面に乙女峠が見

渡される……この荒庭のすぐ水の上が、いま詣もつでた榎の宮裏で、

暗いほどな茂りです。水はその陰から透通る霞のように流れて、

幅十間ばかり、水筋を軽くすらすらと引いて行きます。この水面に、もし、ふつくりとした浪が二ツ処立ったら、それがすぐに美人の乳房に見えましょう。宮の森を黒髪にして、ちようど水脈の血に揺らぐのが真白な胸に当るんですね、裳は裾野をかけて、うつくしく雪に捌けましょう。――

椿がつばき一輪、冷くて、燃えるようなのが、すつと浮いて来ると、

……浮藻うきも――藻がまた綺麗なのです。二丈三丈、萌黄色もえぎいろに長く

靡なびいて、房々と重かさなつて、その茂ったのが底まで澄んで、透通つて、

軟やわらかな細い葉に、ぱらぱらと露を丸く吸ったのが水の中に映るので

すが――浮いて通るその緋色ひいろの山椿が……藻のそよぐのに引寄せ

られて、水の上を、少し斜ななめに流れて来て、藻の上へすつと留まっ

て、熟^{じつ}となる。……浅瀬もこの時は、淵^{ふち}のように寂然^{しん}とする。また一つ流れて来ます。今度は前の椿が、ちよつと傾いて招くように見えて、それが寄るのを、いま居た藻の上に留めて、先^{ただよ}のは漾つて、別れて行く。

また一輪浮いて来ます。——何だか、天の川を誘い合つて、天女の簪^{かんざし}が泳ぐようで、私は恍惚^{うつとり}、いや茫然^{ぼうぜん}としたのですよ。これは風情^{ふうせい}じや……と居士も、巾着^{きんちやく} 着^き じめの煙草入の口を解いて、葡萄^{ぶどう}に栗鼠^{りす}を高彫^{たかぼり}した銀煙管^{ぎんせんくわん}で、悠暢^{ゆうちやう}としてうまそうに喫^のんでいました。

目の前へ——水が、向う岸から両岐^{ふたつ}に尖^{とが}つて切れて、一幅裾^{ひととはば} 裾^{そひ} 拡^ろがりに、風に半幅を絞った形に、薄い水脚が立った、と思う

と、真黒な面がぬいと出ました。あ、この幽艶清雅な境へ、
 凄まじいすさ 闖入者ちんにゆうしや！ と見ると、ぬめりとした長い面が、およ
 そ一尺ばかり、左右へ、いぶりを振って、ひゅつひゅつと水を捌さば
 いて、真横に私たちの方へ切つて来る。鰯どじようか、鯉こいか、鮒ふなか、鯰なまずか、
 と思うのが、二人とも立つて不意に顔を見合わせた目に、歴々ありあり
 と映ると思う、その隙もなかった。

——馬じや……

と居士が、太く怯ひどえた声で喚おびいた。私もぎよつとして後へ退つ
 た。

いや、嘘のような話です——遥はるかに蘆あしの湖こを泳ぐ馬が、ここへ映
 ったと思つたとしてもよし、軍書、合戦記の昔をそのまま幻に視み

たとしても、どっち道夢見たように、瞬間、馬だと思ったのは事実です。

やあい、そこへ遁にげたい……泳いでらい、畜生々々。わんぱくが、四五人ばらばらと、畠はたけの縁へりへ両方から、向う岸へ立ちました。

——鼠じゃ……鼠じゃ、畜生めが——

と居士がはじめて言つたのです。ばしやんばしやん、氷ひようちゆう柱

のように水が匆はねる、小児こどもたちは続けさまに石を打った。この騒

ぎに、植木屋も三人ばかり、ずツと来て、泳ぐ、泳ぐ、泳ぐ、泳ぐ……と感に堪えて見ている。

見事なものです。實際たぐみ巧に泳ぐ。が、およそ中流の処を乗切れない。向つて前へ礫つぶてが落ちると、すつと引く。横へ飛ぶと、かわ

して避ける。避けつつ渡るのですから間がありました。はじめは首だけ浮いたのですが、礫を避けるはずみに飛んで浮くのが見え
た時は可^{おそろし}恐^{はげ}い兀^{まだら}斑の大鼠で。畜生め、若い時は、一手^{ひとて}、手裏剣も心得たぞ——とニヤニヤと笑いながら、居士が石を取って狙^ねったんです。小児^{こども}の手からは、やや着弾距離を脱して、八方こ
つちへ近づいた処を、居士が三度続けて打った。二度とも沈んで、
鼠の形が水面から見えなくなつては、二度とも、むくむくと浮い
て出て、澄ましてまた水を切りましたがね、あたった！ と思う
三度の時には、もう沈んだきり、それきりまるで見えなくなる。
……

水は清く流れました、が、風が少し出ましてね、何となくざつ

と鳴ると、……まさか、そこへ——水を潜くぐつて遁げたものではありません
ますまいが、宮裏の森の下の真暗まっくらな中に落おち重かさなった山椿の花
が、ざわざわと動いて、あとからあとから、乱れて、散つて、浮
いて来る。……大木の椿も、森の中に、いま燃ゆるように影を分
けて、その友だちを覗のぞいたようです。——これはまた見ものにな
った——見るうちに、列を織つて、幾つともなく椿の花が流れて
行く。……一町ばかり下しもに、そこに第一の水車みずぐるまが見えます。
四五間さきに水車、また第三の水車、第四、第五と続いたのが見
えます。流ながれの折曲る処に、第六のが半輪の月形に覗いていました。
——見る内に、その第一の水車の歯へ、一輪紅椿が引掛ひっかつた——
——続いて三ツ四ツ、くるりと廻るうちに七ツ十ウ……たちまちく

るくると緋色に累かさなると、直ぐ次の、また次の車へもおなじように
ひっからま

引 搦ひつて、廻りながら累るのが、流れる水脚のままなんです
から、早いも遅いも考える間はありません。揃ひつて真紅な雪が降
積るかと見えて、それが一つ一つ、舞いながら、ちらちらと水晶
を溶いた水に揺れます。呆あけに取られて、ああ、綺麗だ、綺麗だ、
と思ううちに、水玉を投げて、紅くれないの※を揚げると、どうでしょう、
引ひいている川添やの家ごとの軒より高く、とさかの燃えるように、
水柱を、颯さつと揃ひつて挙げました。

居士が、けたたましく二つ三つ足あし踏ぶみをして、胸を揺ゆつて、

（火事じゃ、……宿しゆくじゃ、おたにの方じゃ——御免。）とひよこ

ひよこと日ひ和より下げ駄たで駆出しざまに、門を飛び出ようとして、振返

つて、（やあ、皆も来てくれ。）尋常^{ただ}ごとではありません。植木屋徒^{であ}も誘^いわれて、残らずどやどや駆けて出る。私はとぼんとして、一人、離^{はなれ}島^{しま}に残された気がしたんです。こんな島には、あの怪^{あやし}い大^す鼠も棲^すもうと思う、何となく、気を打って、みまわしますとね。」

「はあ——」

「ものの三間^{よど}とは離れません。宮裏に、この地^じ境^{かい}らしい、水が窪^なみ入^れった淀^{よど}みに、朽ちた欄干^{らんかん}ぐるみ、池の橋の一部が落^お込んで、流^{なが}れとすれすれに見えて、上へ落椿^{おちつばき}が溜^{たま}りました。うつろに、もの寂^{さび}しくただ一人で、いまそれを見た時に、花がむくむくと動くと、真^ま黒^{くろ}な面^{つら}を出した、——尖^{とが}った馬^{うま}です。」

「や。」

「鼠です。大鼠がずぶずぶと水を刎^はねて、鯰^{なます}がギリシヤ製の尖^{とがり}兜^{かぶと}を頂いたごとく——のそりと立って、黄色い目で、この方をじろりと。」

「……………」

声は、カーンと響いて、真^ま暗^{くら}になった。——隧^{トン}道^{ネル}を抜けるのである。

「思わず畜生！　と言ったが夢中で遁^にげました。水車のあたりは、何にもありません、流^{ながれ}がせんせんと響くばかり静まり返ったものです。ですが——お谷さん——もう分ったでしょう。欄干^{もた}に凭^{もた}れて東海道を覗いた三島宿の代表者。……これが生^{うまれつき}得^え絵^えを見て

も毛穴が立つほど鼠きらいが嫌なんだと言います。ここにおいて、居士が、騎士ナイトに鬢びんぱつ髪を染めた次第です。宿しゆくのその二階家の前は、一杯の人ばかりで……欄干の二階の雨戸も、軒の大戸も、ぴつたりと閉まっていました。口々に雑談をするのを聞くと、お谷さんが、朝化粧の上に、七つ道具で今しがた、湯へ行こうと、門の小橋を跨またぎかけて、あつと言った、赤い鼠！ と、あ、と声を内へ引いて遁込んで、けたたましい足音で、階はしご子壇を駆上がると、あれえあれえと二階を飛廻つて欄干へ出た。赤い鼠がそこまで追廻したものらしい。キャツとそこで悲鳴を立てると、女は、宙へ、飛上った。糸くもの仙人を倒さかさまだ、その白さったら、と消防夫しよくとしらしい若い奴は怪しからん事を。——そこへ、両手で空くうを掴つかんで煙を搔かき分け

るように、火事じゃ、と駆つけた居士が、（やあ、お谷、軒をそれ火が嘗めるわ、ええ何をしとる）と太鼓ぬけに上つて、二階へ出て、縁に倒れたのを、——その時やつと女中も手伝つて、抱込んだと言います。これじゃ戸をしめずにはおられますまい。」

「驚きました、実に驚きましたな……三島一と言いながら、海道一の、したたかな鼠ですな。」

自動車は隧道へ続けて入った。

「国境を越えましたよ。」

と主人が言つた。

「……時に、お話につれて申すようですけれども、それを伺つて

はどうやら黙っておられないような気がしますので。……さあ、
 しかもちようど、昨年、その頃です。江の浦口野の入海へ漾つ
 た、漂流物がありましたな、一頃はえらい騒ぎでございました
 よ。浜方で拾った。それが——困りましたな——これもお話の中
 にありましたが、大な青竹の三尺余のずんどです。

一体こうした僻地で、これが源氏の畠でなければ、さしずめ平

家の落人が隠れようという処なんで、毎度怪い事を聞きます。

この道が開けません、つい以前の事です。……お待ち下さい：

…この浦一円は鰯の漁場で、秋十月の半ばからは袋網というのを

曳きます、大漁となると、大袈裟ではありません、海岸三里四里

の間、ずつと静浦の町中まで、浜一面に鰯を乾します。畝も

畑もあつたものじゃありません、ひさしした 廂 下 から土間の竈まわりま

で、鰯を詰込んで、どうかすると、この石柵の上まで敷詰める。

——ところが、大漁といううちにも、その時は、またおびただし 夥 多く

鰯があがりました。獅子浜在の、良介に次吉じきちという親子が、氣を

替えて、鳥賊釣いかづりに沖へ出ました。暗夜やみの晩で。——しかし一尾びきも

かかりません。思切つて船を漕こぎ戻したのが子の刻ね過ぎで、浦近

く、あれ、あれです、……あの赤島のこつちまで来ると、かえつ

て朦朧もうろうと薄あかりに月がさします。びしやりびしやり、ばちや

ばちやと、ふなべり 舷で黒いものがもつ 纏れて泳ぐ。」

「鼠。」

「いや、お待ち下さい、人間で。……親子は顔を見合わせたそう

ですが、助け上げると、ぐしよ濡れの坊主です。——仔細しさいを聞いても、何にも言わない。雫しずくの垂る細い手で、ただ、陸おかを指ゆびさして、上げてくれ、と言うのでしてな。」

「可い厭やだなあ。」

「上げるために助けたのだから、これに異議はありません。浜は、それ、その時大漁で、鰯の上を踏ふんで通る。……坊主が、これを皆食うか、と云った。坊主だけに鰯を食うかと聞くもいいが、ぬかし方が頭横柄ずおうへいで。……血の氣の多い漁師です、癩しやくに触ったから、当り前めえよ、と若いのが言うのと、（人間の食うほどは俺おれも食う、）と言いますとな、両手で一掴つかみにしてべろべろと頬張りました。頬張るあとから、取っては食い、掴んでは食うほどに、あな

た、だんだん腹這い^{はらば}にぐにやぐにやと首を伸ばして、ずるずると鰯の山を吸込むと、五斛^{こく}、十斛、瞬く間に、満ちみちた鰯が消えて、浜の小雨は貝殻をたたいて、暗い月が砂に映ったのです。

（まだあるか、）と仰^{おあおむ}向けに起きた、坊主の腹は、だぶだぶとふくれて、鰯のように青く光って、げいと、口から腥い息^{なまぐさ}を吹いた。随分大胆なのが、親子とも気絶しました。鮫^{あんこう}鰯坊主と、：唯今でも、気味の悪い、幽霊の浜風にうわさをしますが、何の化ものとも分りません。――

といった場処で。――しかし、昨年――今度の漂流物は、そんな可厭^{いや}らしいものではないので。……青竹の中には、何ともたえがたない、美しい女像がありました。ところが、天女のようなだ

とも言え、女神の船玉様の姿だとも言いますし、いや、ぴらぴらの簪かんざしして、翡翠ひすいの耳飾を飾った支那しなの夫人の姿だとも言つて、現に見たものがそこにある筈はずのものを、確しかと取留めたことはないのでございますが、手前が申すまでもありません。いわゆる、流れものというものには、昔から、種々の神秘的な伝説がいくらもあります。それが、目の前へ、その不思議が現われて来たものなんです。第一、竹筒ばかりではない。それがもう一重ひとえ、セメンだる樽に封じてあつたと言え、甚しいのは、小さな櫓かいが添つて、箱船に乘せてあつた、などとも申します。

何しろ、美うつくしい像だけは事実で。——俗間みだりで、濫に扱うべきでない、もつともな分別です。すぐに近間ちかまの山寺へ——浜方一同か

ら預ける事にしました。が、三日も経たないのに、寺から世話人に返して来ました。預った夜から、いままでに覚え^よない、凄じ^{すさま}い鼠の荒れ方で、何と、昼も騒ぐ。……（困りましたよ、これも、あなたのお話について言うようですが）それが皆その像を狙^{ねら}うので、人手は足りず、お守をしかねると言うのです。猫を紙袋^{かんぶくろ}に入れて、ちよいとつけばニヤンと鳴かせる、山寺の和尚さんも、鼠には困った。あと、二度までも近在の寺に頼んだが、そのいずれからも返して来ます。おなじく鼠が掛^かるので。……ところが、最初の山寺でもそうだったと申しますが、鼠が女像の足を狙う。……朝顔を噛^かむようだ。……唯今でも皆がそう言うのでございませがな、これが変です。足を狙うのが、朝顔を噛^かむようだ。爪さ

きが薄く白いというのか、裳もすそ、褌つま、裾すそが、瑠璃るり、青、紅あかだのとい
う心か、その辺が判明はつきりいたしません。承った処では、居士だと、
牡丹ぼたんのおひたしで、鼠は朝顔のさしみですか。いや、お話がお
くれましたが、端初はなから、あなた——美しい像は、跣足はだしだ。跣足
が痛わしい、お最惜いとい……と、てんでに申すんですが、御神体は
格段……お仏像は靴を召さないのが多いようで、誰もそれを怪あやしま
ないのに、今度の像に限って、おまけに、素足とも言わない、跣
足がお痛わしい——何となく漂泊流離の境遇、落ちゆうどの様子
があつて、お最惜い。そこを鼠が荒すというのは、女像全体にか
かる暗示の意味が、おのずから人の情に憑うづつたのかも知れません。
ところで、浜方でも相談して、はじめ、寄り着かれた海岸近くに、

どこか思召しにかなった場所はなかうかと、心して捜すと、い
 くらもあります。これは陸おかで探るより、船で見る方が手取り早う
 ございますよ。樹の根、巖いわの角、この巖山の切崖きりぎしに、しかるべ
 き室むろに見立てられる巖穴がありました。石工いしやが入って、鑿のみなめで滑らかに
 して、狡わる鼠ねずみを防ぐには、何より、石の扉をしめて祭りました。
 海で拾い上げたのが巳みの日だった処から、巳の日様。——しかし
 弁財天の御縁日だというので、やがて、皆みんなが（巳の時様）。——
 巳の時様、とそう云っているのです。朝に晩に、聞いて
 存じながら、手前はまだ拝見しません。沼津、三島へ出ますにも、
 ここはぐつと大廻りになります。出掛けるとなると、いつも用事
 で、忙しいものですから。……

——御都合で、今日、御案内かたがた、手前も拝見をしまして
も……」

「願う処ですな。」

そこで、主人が呼掛けようとしたらしい運転手は、ふと辰さん
(運転手)の方で輪を留めた。

「どうした。」

あたかもまた一つ、颯さつと冷いトンネル隧道の口である。

「ええ、あの出口へ自動車が。」

「おおそうか。……ええ、むやみに動かしては危あぶないぞ。」

「むこうで、かわしたようです。」

トンネル隧道を、爆音を立てながら、一息に乗り越すと、ハツとした、

出る途端に、擦違すれちがうように先方さきのが入った。

「危え、畜生！」

喚わめくと同時に、辰さんは、制動機を掛けた。が、ぱらぱらと落ちかかる巖いわ膚はだの清水より、私たちは冷汗になった。乗違えた自動車は、さながら、蔽おおいかかったように見えて、隧トンネル道の中へ真ま暗くらに消えたのである。

主人が妙に、寂しく笑って、

「何だか、口の尖とんがった、色の黒い奴が乗っていたようですぜ。」

「隧トンネル道の中へ押立おつたった耳が映ったようだね。」

と記者が言った。

「辰さん。」

いま、出そうとする運転手を呼んで、

「巳の時さん——それ、女像の寄り神を祭ったというのは、もつと先方さきだつけね。」

「旦那、通越とおりこしました。」

「おや、はてな、獅子浜へ出る処だと思ったが。」

「いいえ、多比の奥へ引込んだ、がけの処です。」

「ああ、竜が、爪で珠をつかんでいようという肝心の処だ。……成程。」

「引返しましょうよ。」

「車はかわります。」

途中では、遥はるかに海ぞいを小さく行く、自動車自動車が鼠はしの馳はしるように

見えて、岬みさきにかくれた。

山藤が紫に、椿が抱いた、群ぐんじよう青いの巖いわの聳そびえたのに、純白な

石の扉の、まだ新しいのが、ひたと鎖とぎされて、緋ひの椿の、落ちた

のではない、優やさしい花が幾組ほこらか祠ほこらに供えてあつた。その花には届く

が、低いのも階子はしごか、しかるべき壇いがなくては、扉には触れら

れない。辰さんが、矗しゆくりつ立いして、巖いわの根を踏んで、背のびをし

た。が、けたたましく叫んで、仰向あおむけに反そつて飛んで、手足かえるを蛙

のごとく匆はねて騒いだ。

おなじく供えた一束の葉の蔭に、大おおきな黒鼠が耳を立て、口とがを尖

らしていたのである。

憎い畜生かな。

石を打つは、その扉をたた敲くに相同じい。まして疵きずつくるおそれあるをや。

「自動車を持つ、ありたけの音を、最高度でやつつけたまえ。」
と記者が云つた。

運転手は踊躍こおどりした。もの凄まじい爆音を立てると、さすがに驚いたように草が騒いだ。たちまち道を一飛びに、鼠は海へ飛んで、赤島に向いて、碧へきしよく色の波に乗つた。

——馬だ——馬だ——馬だ——

遠く叫んだ、声が響いて、小さな船は舳みよしを煽あおり、漁夫は手を挙げた。

その泳いだ形容は、読者の想像に任せよう。

巳の時の夫人には、後日の引見を懇請して、二人は深く礼した。
そのまま、沼津に向つて、車は白鱗青蛇はくりんせいだの背を馳はせた。

大正十五（一九二六）年十月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成8」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年5月23日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集」岩波書店

1942（昭和17）年7月刊行開始

入力：門田裕志

校正：林 幸雄

2001年9月17日公開

2005年9月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

半島一奇抄

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>